

# 幸せになりたい私が 10年前にしたこと



広瀬 瑞記

## 人生を変える方法とは何か

---

「人生が変わるような本が読みたくないか？」

教授の甘い言葉に誘われて本屋で手に取ったのが全ての始まりだった。

別に自分の人生に不満がある訳ではない。自分が不幸だとか、幸福だとか考えた事がないし、まして考えたところで答えなんて出てこないであろうことが判っている。だから、この本を手にとったのかもしれない。「幸福とは何か？」「不幸とは何か？」を知りたいという純粹培養の好奇心を満たすためだけに。

ラッセル著作の『幸福論』という難解な本を、大学2年の夏の暑い日に私は本屋で購入した。

それは運命的なの出会いだった。寝坊をしたから大慌てで食パンを口にくわえて駅まで走っている時に、人とぶつかって運命の出会いを果たした…という少女漫画にありがちな運命的な出会いを私はした。

いつものように西日が差し込める講義室で多くの学生が昼寝をしている中、教授が呟いた一言を私は聞き漏らさずノートに書き記していた。

——人生を変えたければラッセルの『幸福論』を読め！ By 教授

授業を終えた私は迷う事なく大学の近くにある本屋へ駆け込み、文庫として発売されている件の『幸福論』という本を手に取り、またしても迷う事なく購入した。「家に帰ったら、美味しいコーヒーとチョコを食べながら読んでみよう」そんな軽い気持ちで本の一ページ目を開く。

「幸福を知るには不幸の種類を知らなくてはならない」

えっ？！私は幸福を知りたいのに不幸を知らなければならないの？私が知りたいのは幸福であって、人生を変えたいだけなのに何故不幸を知らなくてはならないのか？

読み始めて一分もかからずにツッコミを入れたところで、著者がそう主張しているのだからそれに従わなくてはならないのが読者である。私は素直に著者が示すように不幸の種類勉強を始

めた。

本を手にとってから一月が経過した。

私は未だに不幸の勉強をしている。そして、幸福にはほど遠い所を彷徨っている。読めども読めども進まない。文字を追えば追うほど睡魔が私を襲ってきてページが進まない。

睡魔との闘いをくり返したが二月经っても、三月经っても幸福には辿りつけずにいた私はついに、睡魔との闘いを放棄した。

言い訳をすれば論文を書く準備をしなければならず、専攻している関連の本を読まなければならなくなっただけなのだが、「これ幸い！」とばかりに睡魔と休戦協定を不幸の最中で結んだのだった。

そして、夏の暑い日に『幸福論』を購入してから九年が経過した今――

私は今も睡魔との休戦協定を結んだままではいる、と言えは聞こえは良いかもしれないが、私は睡魔と不幸との闘いに負けたのだ。本棚には唯一読み終わっていない『幸福論』が日に焼かれた姿で「早く読め！」とばかりに鎮座している。

この本を購入し十年目の夏が近づいている。節目の年である。

未だ変えられていない自分の人生を変えるために、空を切るように掴むことの出来ない「幸福」を得るためにも私は気持ちを新たに日に焼けて見るも無惨な姿となったラッセルの『幸福論』に闘いを挑まなくてはならないのかもしれない。

例えそれが、教授の売り文句を鵜呑みにしてしまった結果の「不幸」であったとしても。